

アジア研究図書館

編集・発行：東京大学附属図書館アジア研究図書館研究開発部門（RASARL）

113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学附属図書館 アジア研究図書館担当 asialib@lib.u-tokyo.ac.jp

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/asia>

第5号 目次

アジア研究図書館配架状況	1	連載・アジア映画の迷宮 第5回	8
アジア研究図書館活動報告	2	澁谷由紀 「ベトナム映画」の広がり	
連載・アジアの言語・文字体系 第5回	5	アジア研究図書館利用案内	12
中井 勇人 「満州（マンジュ）」と満洲語・満洲文字		次号の予定	12

アジア研究図書館 配架状況

アジア研究図書館は、従来は各部局が保有してきたアジア関係諸資料を可能な限り集約して運用することで、より効率的な図書館サービスを利用者に提供することを目標のひとつにしています。

以上を実現するため、開架に配架する資料と自動書庫に保管する資料のうち、まず前者について令和元年度から各部局より移管される資料を搬入し、作業を進めてきました。途中、新型コロナウイルス感染症の蔓延によって、若干の作業遅滞を余儀なくされる事態に陥りましたが、現時点で3万余冊を開架資料として配架しました。移管を予定する残り1万余冊についても、順次配架される予定です。

開架分資料の移管作業が終了した時点で、改めて詳細な内訳を公表します。

地域分類別(含・大型本)		配架冊数
1	アジア(含・東洋文庫)	2354
2	東アジア	11529
3	東南アジア	3596
4	南アジア	5743
5	中央ユーラシア	1862
6	西アジア	4821
TRCCS	台湾漢学リソースセンター蔵書	656
R1	参考図書(ア)	35
R2	参考図書(東)	379
R3	参考図書(東南)	183
R4	参考図書(南)	250
R5	参考図書(中央)	145
R6	参考図書(西)	209
		計 31762

(2021年9月17日時点での冊数)

*分類法はこちらをご覧ください：

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/asia/material>

アジア研究図書館 活動報告

アジア資料目録作成ワークショップ「現代ウイグル語編」開催報告

徳原 靖浩 (U-PARL)

東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門 (U-PARL) 協働型アジア研究プロジェクト「アジア情報資源の組織化に関する研究：目録マニュアルの作成」(代表：徳原靖浩)は、大学・研究機関図書館におけるアジア諸言語の資料の目録作成のノウハウを共有するため、講師を招いて「アジア資料目録作成ワークショップ」を定期的で開催しています。

去る2021年8月4日(水)、第5回目となる「現代ウイグル語編」を開催しました。今回は、4月に発足したばかりのアジア研究図書館研究開発部門 (RASARL) の河原弥生准教授を講師に迎え、アジア研究図書館の研究活動を支える二つの部門の協働による初のイベントとなりました。

【プログラム】

14:00 徳原靖浩「アジア資料整理の現場から」

14:10 河原弥生「現代ウイグル語資料の概要と目録作成」

15:00 質疑応答およびアジア資料の整理、収集等について意見交換

(16:00 終了)

いわゆるコロナ禍での2回目の目録作成ワークショップとなる今回は、前回の「ウルドゥー語編」(2020年11月18日)同様、オンラインでの開催となりました。短い期間での告知となりましたが、アジア資料を扱う大学図書館や研究図書館の職員を中心

に、43名の参加がありました。

徳原は、趣旨説明を兼ねて「アジア資料整理の現場から」と題する報告を行いました。アジア資料の目録作成において、コーディングマニュアルや目録規則に明文化されていないために作業者が判断に迷いやすい2つの事例を挙げ、規則類の不足を補うためにも目録担当者間で認識を共有し継承していくことの必要性を指摘しました。

ワークショップでは、河原准教授が現代ウイグル語の言語的特徴や、名称から混同されやすい古ウイグル語と現代ウイグル語の違い、現代ウイグル語資料の出版事情、文字表記の変遷、ALA-LC翻字表の誤りの指摘、PCでの文字入力方法、責任表示や出版情報で頻繁に用いられる単語の例など、具体例を挙げながら、目録作成をする上で知っておくべき情報を数多く紹介・解説しました。また参加者を交えた質疑応答とディスカッションでは、特殊な文字を含むウイグル新文字の書誌を利用者が検索できるようにするにはどうするかなどについて意見交換がなされました。

オンラインイベントには参加者の反応が分かりづらいという難点がありますが、参加者から寄せられたアンケートの回答には、資料や講義内容がとても分かりやすく、実用的な内容だったとの感想が多く見られました。アジア資料の目録作成においては、コンピュータで文字を扱う困難などもあり、他の言語でも開催してほしいとの要望を頂いています。今後もアジア研究図書館ならではの企画として続けていきたいと思えます。

第3回協働型アジア研究オンラインセミナー「古代エジプト資料の記録、分析、利活用を考える」開催報告

永井 正勝 (U-PARL)

東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門 (U-PARL) 協働型アジア研究プロジェクト「オリエント世界を対象とした研究資源のデジタル化とその利活用に関する研究」(代表: 永井正勝) が主催となるオンラインセミナーを2021年9月3日 (金) 13:00~17:00に開催した。

本セミナーの第一の目的は「過去の資料」と「現在の研究者の研究行為(資料の記録・分析・利活用)」の接点を巡る現状を確認すべく、人文学的な問いやデジタル技術の扱いを含めた内容で実践報告を行うことであった。プログラムは以下の通りである。

【13:00~13:20】 主旨説明

「古代エジプト資料の記録、読解、利活用ー現状と展望ー」永井正勝 (東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門)

【13:20~14:00】 資料を記録する

「エジプトのフィールドにおける考古学・碑銘学の新しい記録方法について」河合望 (金沢大学新学術創成研究機構)

【14:00~14:40】 資料を分析する

「リビア王朝の成立過程をめぐる一考察ーアビドス出土のステラCairo JdE 66285の検討からー」藤井信之 (関西大学東西学術研究所)

【15:00~15:40】 資料を利活用する

「博物館教育普及事業における研究資源3Dデータの利活用」田澤恵子 (公益財団法人 古代オリエント博物館)

【15:40~17:00】 討論

ディスカッション

山花京子 (東海大学文化社会学部)

中野智章 (中部大学国際関係学部)

過去の資料に対する記録・分析・利活用についての実践報告によって浮かび上がってきたのは、研究行為によって生じる「研究データ (研究者の頭の中にある情報からデジタルデータまで)」の存在と扱いであった。このような、報告を踏まえた課題を討論の場で検討するというのがセミナーの第二の目的であり、討論ではディスカッションからの報告・コメントの後、①「研究データ」とは何か? ②「原資料/原史料」に基づく研究、③教育・普及・研究体制の新しいかたち、という3つの点から議論を交わした。

セミナーの参加者は、大学教員・研究員・学芸員37名 (20.9%)、学部生・大学院生・研究生28名 (15.8%)、一般112名 (63.3%)、合計177名であった。

東京大学附属図書館
U-PARL アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門 (U-PARL)
第3回 協働型アジア研究オンラインセミナー
9月3日 (金) 13:00 - 17:00
古代エジプト資料の
記録、分析、利活用を考える

- ▶ 13:00 - 13:20 主旨説明
「古代エジプト資料の記録、読解、利活用ー現状と展望ー」
永井正勝 (東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門)
- ▶ 13:20 - 14:00 資料を記録する
「エジプトのフィールドにおける考古学・碑銘学の新しい記録方法について」
河合望 (金沢大学新学術創成研究機構)
- ▶ 14:00 - 14:40 資料を分析する
「リビア王朝の成立過程をめぐる一考察ーアビドス出土のステラCairo JdE 66285の検討からー」
藤井信之 (関西大学東西学術研究所)
- ▶ 15:00 - 15:40 資料を利活用する
「博物館教育普及事業における研究資源3Dデータの活用」
田澤恵子 (公益財団法人 古代オリエント博物館)
- ▶ 15:40 - 17:00 討論
ディスカッション
山花京子 (東海大学文化社会学部)
中野智章 (中部大学国際関係学部)

参加無料 * 要申込 (Zoomによるオンライン開催)
<http://u-parl.lib.u-tokyo.ac.jp/archives/japanese/seminar20210903>

お問い合わせ先 uparl@lib.u-tokyo.ac.jp
協働型アジア研究「オリエント世界を対象とした研究資源のデジタル化とその利活用に関する研究」(代表: 永井正勝)
主催 東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門 (U-PARL)

国際研究集会「秦の淵源—秦文化研究の最前線—」開催報告

鈴木 舞 (研究開発部門)

秦は、中国最初の統一王朝としてよく知られる。そこに至るまでの過程としての春秋戦国時代、さらに近年では、発掘調査の進展により、西周時代に遡る秦人の遺跡が数多く発見され、いわゆる「早期秦文化」が学界の注目を集めている。

2021年6月20日に開催した本研究集会では、中国現地で発掘調査・研究を牽引する研究者を始め、日中両国の考古学者9名が、秦文化・早期秦文化に関する最新の研究成果を公開した。詳細は次のとおりである。

○飯島武次 (駒澤大学・東洋文庫)

「早期秦文化の土器」

○焦南峰 (陝西省考古研究院)

「秦、西汉帝王陵封土研究的新认识」

○梁雲 (西北大学)

「论早期秦文化的来源与形成」

○角道亮介 (駒澤大学)

「秦人の都城遺跡」

○大日方一郎 (國學院大学)

「倣銅陶礼器からみた秦の墓制」

○鈴木舞 (東京大学)

「春秋秦国における青銅器生産の始まり」

○曹龙 (陝西省考古研究院)

「泾渭秦墓出土低温陶牛车研究」

○菊地大樹 (総合研究大学院大学)

「秦馬の実像」

○田畑潤 (愛知県陶磁美術館)

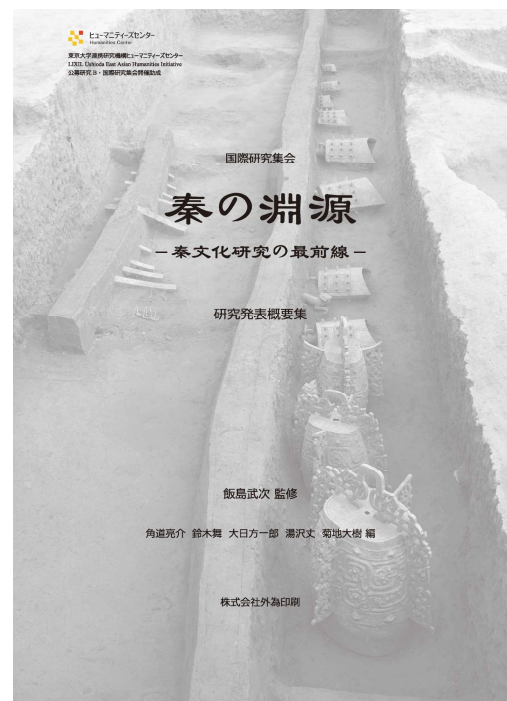
「西戎文化の土器」 *紙上報告

秦の研究には、考古学・文献史学双方からの研究が必要である。集会の総括として、平勢隆郎氏(東京大学・東洋文庫)から、文献資料から知られる秦の姿に対し、今回の各研究では、秦の人々の遺した考古資料を用いて、より具体的な時代像が示されたこと、一方で、文献史学・考古学ともに未だ解決すべき点は数多いことが示された。

本集会は、昨年来の新型コロナウイルスの世界的蔓延の中、オンライン会議システムZOOMを用いて開催した。事務局5名のみ、東京大学附属図書館会議室で運営し、その他の報告者は日本・中国各地から登壇した。特に、梁雲氏は秦文化遺跡の発掘現場からの報告となり、今まさに秦文化研究が進められている姿を垣間見ることができた。オンライン開催ゆえの臨場感であった。また、日本・中国などを中心に、百数十名の来場者があった。各報告後の質疑応答は日中両ヶ国語で行われ、盛況な様子であった。

開催に際し、各報告内容を収録した『秦の淵源—秦文化研究の最前線—』(ISBN 978-4-600-000788-1、非売品)を刊行し、国内外の研究機関へ寄贈させて頂いた。ご関心を持たれた方は、本書もご参照頂きたい。

なお本集会は、東京大学連携研究機構ヒューマニティーズセンターLIXIL潮田東アジア人文研究拠点の助成(国際研究集会助成(B);研究代表者 鈴木舞)の下、同センター主催で行った。また、東京大学附属図書館アジア研究図書館研究開発部門、陝西省考古研究院、西北大学文化遺産学院の後援を得た。各機関に記して感謝申し上げる。



『秦の淵源—秦文化研究の最前線—』書影

「満洲（マンジュ）」と満洲語・満洲文字

中井 勇人

(なかい ゆうと 東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門 (U-PARL) 特任専門職員)

日本語で「満洲語」というと、二通りの意味がありうる。一つは、1930年代に日本が中国東北部に樹立した「満洲国」で通用した言語を指し、これは実際には中国語(漢語)である。もう一つの意味は、17世紀に清朝を樹立した満洲人(マンジュ人)という人々が歴史的に用いていたツングース系言語である。ここで取り上げる「満洲語」は、後者である。

ツングース系の言語は、主にシベリア～東北アジアの森林地帯に住まう人々によって話されている。満洲語のほかには、ほかにエヴェン語、ウデヘ語、ナナイ語などの諸言語が挙げられる。内陸アジア言語として似た性質をもつテュルク系、モンゴル系諸語とともに「アルタイ諸語」などと括られることもある。語順や文法の点では日本語や韓国語とも近しく、日本人や韓国人にとっては学習しやすい言語とも言えるだろう。

多くの日本人は「満洲」という言葉について、それが中国東北部を指す地名だと思っている。だが「満洲」という語は、もともと地名ではなかった。これは「マンジュ Manju」という満洲語の単語を漢字で音写したものである。14世紀末～17世紀前半、今日の中国東北部～ロシア沿海地方一帯(この地域を英語でマンチュリア Manchuria と呼ぶが、これも「マンジュ」の語が地名に転じたものである)には、農耕・狩猟を生業とするジュシェン Jušen (女真・女直)というツングース系集団が居住していた。当時、ジュシェン人の社会には統合された

国家が存在せず、大小さまざまな集団を率いる領主たちが各地に割拠していたのである。だが16世紀末、ヌルハチという領主が急速に勢力を拡大して他の領主たちを従え、分裂していたジュシェン社会を統合し自らの国家を樹立するに至った。「満洲(=マンジュ)」とは、もともこの国の名前であった。なお、「マンジュ」という国号の由来はよくわかっていない。文殊菩薩に由来するという説は有名だが、これは後の時代に清の皇帝たちが喧伝したものであり、特段の根拠はない。

その後、ヌルハチの後を継いで二代目の君主となったホンタイジは、1635年に自分たちの「ジュシェン」という集団名自体を「マンジュ(=満洲)」に改めさせた。かくして「満洲」は民族的な人間集団を指す語となった。そして、この満洲人(マンジュ人)が住まう地域をほかに呼ぶ呼称がなかったため、やがて地名としても「満洲」の語を使うようになったのである。なお、現在の日本の常用漢字には「洲」の字が含まれないため、しばしば「州」の字をもって置き換えて表記される。ために「蘇州」や「荊州」のような「州」だと思っている人も少なくないが、誤解である。

ホンタイジは1636年に皇帝として推戴され、その際に国号をダイチン daicing と称した。これを漢字で表記すると「大清」となる。いわゆる清(清朝)の成立である。清は明が反乱で滅んだことに乗じて南下し、漢地を征服した。そしてモンゴル高原やチ

ベツト高原、さらに中央アジアにも進出して支配を広げ、ユーラシア東方に覇を唱える大帝国となった。満洲語はいわば清の公用語であり、チベット、モンゴル、中央アジア方面を担当した満洲人・モンゴル人の官僚たちも、重要なやりとりを満洲語で行っていた。そのため満洲語は当時、ユーラシア東方全体において非常に重要な役割を果たした言語となったのである。

だが辛亥革命によって清が滅亡すると、20世紀の激動の中で満洲語の母語話者は激減した。今日、中国の遼寧省や吉林省には「少数民族」として「満族」に区分される人々が暮らしているが、満洲語を母語として日常生活を送っている人はほぼ存在しないとみられる。ただ中央アジアには、清代に駐留軍として派遣された人々の末裔にあたる「シベ（錫伯）族」という人々が、いまま満洲語に比較的近い言語（シベ語）を用いて暮らしている。



『満洲実録』巻一冒頭の影印

満洲語を表記するための文字として用いられたのが、満洲文字である。満洲人（マンジュ人）の前身たるジュシェン人は、長らく固有の文字を持たなかった。金の時代に漢字を模した女真文字という独自の文字が創案されたが、あまりに煩瑣なため早々に使われなくなっていた。だが、ヌルハチがマンジュ国を興すに至り、統治のため再び文字を創出する必要に迫られた。そこで17世紀初め頃に創案されたのが、満洲文字（マンジュ文字）である。

満洲文字は、モンゴル文字をもとにして作られた。この図は、ヌルハチの年代記『満洲実録』巻一冒頭の影印である（『大清満洲実録・大清太祖高皇帝実録』台北：華文書局、1964、2頁）。三段のうち上段が満洲文字、中段が漢文、下段がモンゴル文字である。上段と下段を見比べて頂ければ、満洲文字とモンゴル文字がとてもよく似た形をしていることをおわかり頂けるだろう。満洲文字、モンゴル文字はいずれも縦書きで、左の行から右の行へと読む（なお、本来なら漢文は右から左へと読むが、ここでは満洲語やモンゴル語のルールに従い、左から右へ読む）。

ちなみに、満洲文字のもとになったモンゴル文字はウイグル文字をもとにしており、ウイグル文字はソグド人が用いたソグド文字が、そしてソグド文字はアケメネス朝で用いられたアラム文字がもとになっている。実は満洲文字は、ユーラシアの東西に広がるアルファベットの一種なのである。図を横倒しにすると、どことなくローマ字の筆記体やアラビア文字などとも似て見えてはこないだろうか。

以上述べたうち、満洲人とその歴史については、岡田英弘編『別冊「環」16 清朝とは何か』（藤原書店、2009）や松浦茂『清の太祖ヌルハチ』（白帝社、1995）におおよそ基づいている。いずれも優れた概説書であるので、より詳しく知りたい方はぜひ

参照されたい。また、満洲文字や満洲語の文法について学習したい方には、河内良弘・清瀬義三郎則府編著『満洲語文語入門』（京都大学学術出版会、2002）や津曲敏郎『満洲語入門20講』（大学書林、2002）がお勧めである。いずれも学内の図書館に所蔵されている。またアジア研究図書館の参考書架には、満和や満漢の辞書が備え付けられているので、是非利用されたい（そのほか、駒場図書館の参考書架も、各種の満洲語辞書が充実している）。

また本学には、満洲語・満洲文字で書かれたナマの資料も所蔵されている。明治～昭和戦前期、日本の大陸進出と連動して、満洲史や満洲語の研究が推進された。多くの日本人が大陸に渡って現地の文物を購入したことによって、日本国内には様々な満洲語資料が将来されることになった。和田清や小倉進平ら著名な研究者を数多く擁した本学にも、その一端として各種の満洲語資料がもたらされたとみられる。また本学の場合、関東大震災によって多くの蔵書が焼失し、その後各方面からの寄贈によって蔵書が再構築された経緯を持つ。その際にも、寄贈された漢籍類に混じって満洲語資料が収書されたようである。

これらの満洲語資料は現在、総合図書館や東洋文化研究所、文学部などの各部局でバラバラに保管されている。一部の部局では、漢籍目録にあわせて記録したり、中には文学部漢籍コーナーのように独自の満洲語資料目録が作成された部局もあるが、本学全体での所蔵状況は、現在ではもはや不明である。OPACへの登録も万全とは言い難く、中には書庫内に立ち入り書架を実見しなければ見つからない資料もある。そうした状況の不便さは、昨今のような非常事態の中では特に痛感されよう。

アジア研究図書館の関連部局であるU-PARL（東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門）では現

在、本学における満洲語資料（およびその関連資料）の所蔵状況の調査および目録作成業務を行っており、筆者もこれに従事している。この目録化を通じて各部局の満洲語資料の所蔵状況を可視化することで、本学の貴重な満洲語資料群が、より効果的に活用されるようになると期待している。

アジア映画の迷宮

「ベトナム映画」の広がり

澁谷由紀

(しぶや ゆき 東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門 (U-PARL) 特任研究員)

本連載第1回、韓燕麗先生の記事は、「アジア映画という言葉から、どのような映画が連想されるのだろうか」という問いから始まっている。ではベトナム映画という言葉からは、どのような映画が連想されるのだろうか。

いまから14年前、2007年に刊行された窪田守弘氏編の『映画でベトナム：ベトナム映画19本+ベトナム文化』という本がある。この本の冒頭 (p.4) で、「代表的なベトナム映画」として取り上げられているのは、ベトナム系フランス人のトラン・アン・ユン監督によるフランス・ベトナム・香港合作映画『シクロ』(1995年)、同監督によるフランス・ベトナム共同制作映画『青いパイヤの香り』(1993年)、ベトナム系アメリカ人監督トニー・ブイによるアメリカ映画『季節の中で』(1999年)、ユン監督によるフランス・ベトナム共同制作の映画『夏至』(2000年)、シンガポール人ジョナサン・フー監督とベトナム人グエン・ファン・クアン・ビン監督によるベトナム・シンガポール合作映画『コウノトリの歌』(2001年)といった、ベトナム国外在住のベトナム系の監督がベトナムを主題に制作した映画や国際合作映画である。このことから、当時の日本国内では、ベトナムを主題とする映画、ベトナム人監督やベトナムにゆかりのある監督の手による映画、ベトナムで制作されたか撮影された映画、ベトナム語で演じられる映画といったさまざまな種類のベトナム関係映画が、ひとまとめに「ベ

トナム映画」と認識されていたことがわかる。

もちろん、ベトナム人監督がベトナムで撮影し、古い時代のものであれば国营映画社が制作した映画、いわば「純ベトナム産」の映画も日本国内で上演されてきた。早くも1982年には『無人の野』(1979年、グエン・ホン・セン監督)が日本初の統一後のベトナム映画として上映された(岩波ホール 掲載年不明)。またアジアフォーカス・福岡国際映画祭(アジアフォーカス・福岡映画祭)では、1991年開催の第1回においてベトナム映画の金字塔『10月になれば』(1984年、ダン・ニャット・ミン監督)が上演され、第2回ではベトナム映画特集が組まれた(アジアフォーカス・福岡国際映画祭実行委員会 2021: 16-19)。とはいえ、最近まで「純ベトナム産」の映画が一般に劇場公開される頻度は少なかったし(秋葉 2012: 242)、またユン監督の作品のような異国情緒を強調した(坂川 2013: 276)作品が人気を博したから、日本社会においてさまざまな種類のベトナム関係映画がひとまとめに「ベトナム映画」とされてきたのは不思議なことではない。

ではベトナム国内においてはどうか。「さすがに自国の映画に対してそのような『雑な』分類はしないだろう。映画は文化政策の重要な対象であるはずで、検閲もいまだあるというし」というわけで、私はベトナムにおける「ベトナム映画」の範囲は、ベトナム国内で制作された映画やベトナム国籍の監督の手による映画、要する

に狭い意味でのベトナム映画に限られ、さらにベトナムが南北に分断されていた時代の旧南ベトナム側の映画は除外されているのだろうと考えていた。なにせ、旧南ベトナム側の図書や定期刊行物に対するアクセスは、現在なお制限されているのだ。

だからベトナム人映画評論家レ・ホン・ラム氏が2018年に上梓した『ベトナム映画ベスト101本』(写真右)という本を手にした時、私は大変驚いた。この本には1953年から2018年までに公開された「ベトナム映画」が計101本、公開年順に掲載されているのだが、選定されている作品の範囲が私の想像と異なっていたからだ。序文にはこう記されている。「選定された映画はさまざまな時代のものだ。戦中の映画から戦後の映画まで、即席めん時代の映画から新潮流世代の映画まで、完全に国内の監督の映画から戻ってきた越僑監督の映画まで、『こちら側』の映画から『あちら側』の映画のいくつかの作品まで(附録についても参照いただきたい)、完全に国内で制作されたベトナム映画から海外で制作されたベトナム映画まで、劇映画からドキュメンタリーまで…」(Lê Hồng Lâm 2018: 15)。要するに、(1) 旧北ベトナムないし統一後のベトナムで制作された映画と、旧南ベトナムで制作された映画や第一次インドシナ戦争期(「抗仏戦争」期)のフランス側支配地で制作された映画の両方が公然と取り上げられており、(2) ベトナム国内で制作が行われていない作品もベトナム映画とされているのである。なお「即席めん時代」とは低質で型にはまった作品が多くつくられた1990年代初頭のこと(Lê Hồng Lâm 2018: 13)、「新潮流世代」とは新興の民間映画会社で主に娯楽映画を制作する新しい世代のことである(坂川 2018: 130)。

(1) について、巻頭を飾るのは『花の運命』(1953年、ゾアン・ハイ・ティン監督)。

「自力文団の文学作品を映像の形で継承したような」このモノクロ映画はハノイとその近

郊や香港で撮影されたというから(Lê Hồng Lâm 2018: 20-21)、フランスからの独立戦争の間にフランス軍支配下で制作された映画であろう。ドイモイ政策以前の1983年にハノイで刊行された『ベトナム革命映画史(草稿)』(写真左)では正統なベトナム劇映画の出発点は1959年の『分かち難き川の流れ』(ホン・ギー監督・ヒエウ・ザン監督)であるのに(Bành Báo 1983: 146)、それより早いのが注目される。南北分断期(1954~1975年)の作品についても、どちらの「側」かに関わらず公開年順に掲載されている。たとえば、1954年のジュネーブ協定を機に北緯17度線以北に移った人員の妻と旧南ベトナム軍の士官を主人公にした『愛は17度線を越えて』(1972年、ハイ・ニン監督)の後に旧南側のドラマ『路傍の影』(1973年、グエン・ヴァン・トゥオン監督)が掲載され、続いて旧南側で人気を博したコメディ映画『サイゴンの愉快な4人組』(1973年、ラー・トアイ・タン監督)の後に「クリスマス爆撃」下のハノイを描いた『ハノイの少女』(1974年、ハイ・ニン監督)がくるといった具合だ(Lê Hồng Lâm 2018: 50-66)。巻末の附録「1975年以前のサイゴン映画」では、「ベトナム共和国のサイゴン映画」の概略と30作品のリストが掲載され、これらの作品が「芸術的価値による公平な評価がされておらず、ベトナム映画という共通の絵の中で本当の位置に正しく置かれていない」という著者の意見が記されている(Lê Hồng Lâm 2018: 483-487)。

2018年以降、ベトナム政府は旧南ベトナム時代の歌謡の使用等の際に必要な特別な手続きを廃止する動きがあるという(大泉 2020)。ポピュラーカルチャーの分野の「南北統一」と呼べるような動きが、今後出版界や図書館界というより「お堅い」分野にも波及するの、図書館に関わる者として大変興味がある。

(2) について、『ベトナム映画ベスト101本』では高い評価が与えられており、10点満点中8.5~9点と評価された最高位の作品

群の中に、前述の『シクロ』や『青いパイアの香り』が入り、本の巻末を飾るのはベトナム系アメリカ人レオン・レ監督がベトナムで制作した『ソン・ランの響き』（2018年）である。確かに、新潮流時代の幕開けに在外ベトナム人の映画人が果たした（ないし果たしている）役割は大変に大きいものであるし、文化・スポーツ・観光省傘下の映画局主催の「ベトナム映画祭」の選考対象は、「ベトナム語が話されている映画でベトナムの映画制作所によって制作されたまたは外国の組織、個人との間の合作によって制作された、著作権の争いのないもの」（Cục Điện Ảnh and Sở Văn Hóa và Thể Thao Ủy Ban Nhân Dân Tỉnh Bà Rịa - Vũng Tàu 2019）であることからわかるように、「ベトナム映画」の範囲の広さは実は政府お墨付きなのだ。さすがに、レジス・バルニエ監督のフランス映画『インドシナ』（1992年）は「ベトナム映画」の外にあるようだが、2016年のベトナム上演の際には国営テレビ局VTVによって積極的に宣伝された（Phuong Anh and Văn Tuy 2016）。

映画人の言動や政府の文化政策、「ベトナム映画」の国内外の市場における消費のされ方については、今後発展が待望される研究分野といえる。

〈参考文献〉

秋葉亜子. 2012. 「映像：プロパガンダからエンタメへ」今井昭夫・岩井美佐紀編『現代ベトナムを知るための60章』（第2版）237-242. 明石書店.

アジアフォーカス・福岡国際映画祭実行委員会. 2021. 『アジアフォーカス・福岡国際映画祭全作品集：1991-2020』アジアフォーカス・福岡国際映画祭実行委員会. <https://www.focus-on-asia.com/30.pdf>

岩波ホール. 掲載年不明. 「1980年代 上映作品」2021年9月16日アクセス. <https://www.iwanami-hall.com/pastmovie/history/1980%e5%b9%b4%e4%bb%a3>

大泉さやか. 2020. 「『南部解放』以後のベトナムにおける南ベトナム時代の歌謡の管理」『アジア研究』66(1): 21-36.

川口恵子. 2010. 『ジェンダーの比較映画史：「国家の物語」から「ディアスポラの物語」へ』彩流社.

窪田守弘編. 2007. 『映画でベトナム：ベトナム映画19本＋ベトナム文化』南雲堂フェニックス.

坂川直也. 2013. 「[ベトナム] 革命イデオロギーから夢と笑いへ：B級映画都市サイゴンの復活」『地域研究』13(2): 276-282. <http://hdl.handle.net/2433/256117>

———. 2018. 「国民映画から遠く離れて：越僑監督ヴィクター・ヴーのフィルムにおける、ベトナム映画の脱却と継承」福岡まどか・福岡正太編『東南アジアのポピュラーカルチャー：アイデンティティ・国家・グローバル化』130-155. スタイルノート.

Bành, Bảo. 1983. “Nghệ Thuật Phim Truyện Hình Thành (1959-1964).” In *Lịch Sử Điện Ảnh Cách Mạng Việt Nam: Sơ Thảo* (『ベトナム革命映画史（草稿）』), edited by Bành Bảo, and others, 141-195. [Hà Nội]: Cục Điện Ảnh.

Cục Điện Ảnh and Sở Văn Hóa và Thể Thao Ủy Ban Nhân Dân Tỉnh Bà Rịa - Vũng Tàu. 2019. “Điều Lệ Liên Hoan Phim Việt Nam Lần Thứ XXI (「第21回ベトナム映画祭規約」).” Posted November 1, 2019.

<http://lienhoanphim.bvhttdl.gov.vn/dieu-le-lien-hoan-phim-vietnam-la-thu-xi-15>

Lê, Hồng Lâm. 2018. *101 Bộ Phim Việt Nam Hay Nhất* (『ベトナム映画ベスト101本』). Hà Nội: Thế Giới and Công Ty Văn Hoá Truyền Thông Nhã Nam.

Phuong, Anh and Văn Tuy. 2016. “Bộ Phim ‘Đông Dương’ Trở Lại Việt Nam Sau 24 Năm (「映画『インドシナ』24年ぶりにベトナムで再上映」).” Posted November 4, 2016. <https://vtv.vn/viet-nam-va-the-gioi/bo-phim-dong-duong-tro-lai-viet-nam-sau-24-nam-20161104080511509.htm>



『ベトナム革命映画史（草稿）』（左）と『ベトナム映画ベスト101本』（右）

アジア研究図書館利用案内

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/asia/user-guide/guide>

場 所：総合図書館 4 階

開館日：以下閉館日を除くすべての日

閉館日：年末年始(12月28日～1月3日)

定例休館日(概ね毎月第4木曜日)

夏季の一斉休業日(2日間)

試験等大学行事のための閉館日

その他臨時閉館日

貸出冊数・期間：10冊・30日(教職員・学生)

カウンターサービス：平日9：00～17：00

開館時間：

曜日等	通常期	8月・3月
月～金曜日	8：30～22：30	8：30～21：00
土・日・祝日	9：00～19：00	9：00～17：00

学外の方もご利用いただけます。詳しくはホームページをご覧ください。

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/general/user-guide/ou/ou-side/gakugai>

次号の予定

第6号は2022年1月10日に発行予定です。図書館総合展への参加や、ユネスコ・アジア文化センターから寄贈された識字教育関係資料の整理状況、オンキャンパスジョブに関する報告などを行う予定です。

ニューズレターへの情報提供・投稿や、記事へのご要望があれば、東京大学アジア研究図書館宛(asialib@lib.u-tokyo.ac.jp)お知らせ下さい。

編集後記

第5号をお届けします。今号は連載を一部休止し、アジア研究図書館に関わるU-PARL、RASARL両部門に所属する教員の活動報告を掲載いたしました。

未曾有の状況下でのオリンピック狂騒曲をようやく聞き終えたっぽう、コロナ禍はいまなお時に激しく、時に静かに私たちの周りで不穏な旋律を奏で続けています。この楽団はいつ演奏を止めてくれるのでしょうか？ [J]